

都市計画道豊里・久居線道路改良事業に伴う

峯治城跡発掘調査報告

－津市一身田町－

1991・3

三重県埋蔵文化財センター

序

西に鈴鹿の山なみ、東に伊勢の海を望む伊勢平野の各丘陵上には伊勢新聞社が出版した「伊勢の国盗りの物語」の舞台となった、有名な城跡や無名の城跡が多数所在しています。

今はそのほとんどが山林や原野となり往時をしのばせるだけで、一般の人々にはその存在すらもあまり知られていません。

津市一身田町上津部田字ヲの坪に所在する峯治城跡もそのうちの一つですが、城跡の一部に都市計画道豊里・久居線の道路改良事業が計画され、平成元年度と平成2年度の2カ年にわたり事前の発掘調査を実施しました。

ここにその結果を報告するとともに、今後の中世城館の研究の一助となりますことを希望しています。

調査にあたりまして、県土木部都市計画課、津土木事務所、津市教育委員会および（財）三重県建設技術センターをはじめ、地元の方々に多大のご協力をいただきましたことに、末尾ではありますが感謝の意を表します。

三重県埋蔵文化財センター

所長 中林昭一

例 言

1. 本報告書は、都市計画道豊里・久居線改良工事にともない緊急発掘調査を実施した津市一身田上津部田字ワの坪所在の峯治城跡の発掘調査結果をまとめたものである。
2. 調査は次の体制で行った。
- 調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
係長 田中喜久雄 主事 田中久生 主事 穂積裕昌（平成元年度）
主事 福田哲也 主事 田中久生（平成2年度）
3. 調査にあたっては、三重県土木部都市計画課、津土木事務所、（財）三重県建設技術センター、津市教育委員会ならびに地元各位の方々の協力を得た。
4. 現地調査にあたっては奈良女子大学教授 村田修三先生にご指導いただいた。
5. 発掘調査後の出土遺物の整理を上記の担当者の他、管理指導課が行った。
遺物の写真撮影は田村陽一が担当した。
6. 本書の執筆・編集は田中久生が担当した。
7. 插図の方位は、特に断らない限り磁北である。
座標は国土地形図第VI座標系を使用した。
8. 本書で用いた遺構表示略号は下記による。

S B : 据立柱建物・門、SD : 溝・堀、SK : 土坑、SE : 井戸、SX : 通路・橋

目	次
I. 前言	1
II. 位置と環境	2
III. 遺構と遺物	4
I. 第Ⅰ郭	4
2. 第Ⅱ郭	18
3. 第Ⅲ～VI郭	21
4. 第VII郭	22
5. 第VIII～加郭	25
IV.まとめ	28

挿図目次

第1図 道筋地形図	2	PL.1 航空写真（北西から）	調査前全景（北西から）
第2図 略輪図	3	PL.2 第Ⅰ郭講堂全景（南東から）	第Ⅱ郭調査前全景（北から）
第3図 道筋周辺地形図	3	PL.3 調査前軒・厚真（南東から）	調査後航空写真（南東から）
第4図 調査区域地図	5	PL.4 調査後軒・厚真（北西から）	調査後全景（北西から）
第5図 調査前郭部高さ	7	PL.5 第Ⅰ・Ⅱ轄（北西から）	第Ⅰ郭土塁SA1
第6図 収量平面図	9	PL.6 第Ⅰ郭櫻S X 7・門SB 8	第Ⅰ郭門SB 8
第7図 道筋地形図	11	PL.7 第Ⅰ郭明溝S X 1 8	第Ⅰ郭櫻S D 4・上横S X 7・尾S D 5
第8図 調査区分断面図	13	PL.8 第Ⅰ郭附S D 4	第Ⅰ郭附S D 4・土層断面
第9図 S B 予測図	15	PL.9 第Ⅱ郭導入路S X 1 9	第Ⅱ郭SB 2 6
第10図 SD 4裏・土層断面図	16	PL.10 第Ⅱ郭全景（北から）	第Ⅱ郭SK X 3 1
第11図 第Ⅰ郭出土遺物	17	PL.11 第Ⅲ郭漆戸S E 4 1	第Ⅲ郭井戸S E 4 2
第12図 SD 4・H土層	18	PL.12 第Ⅲ～双郭（南から）	第Ⅲ～双郭（南から）
第13図 SD 5出土遺物	19	PL.13 第Ⅳ郭全景（北から）	第Ⅳ～双郭（北から）
第14図 SK 2・4・土層断面図	20	PL.14 羽釜出土状況	大日茶碗出土状況
第15図 第Ⅱ郭出土遺物	20	PL.15 第Ⅱ郭土塁物	
第16図 第Ⅲ～VI郭出土遺物	21	PL.16 SD 4・H土層物	SD 5出土遺物
第17図 SE 4 1実測図	23	PL.17 SD 5出土遺物	第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ郭出土遺物
第18図 第Ⅳ郭出土遺物	24	PL.18 SD 5出土遺物	第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ郭出土遺物
第19図 第Ⅴ郭出土遺物	25	PL.19 第Ⅲ～VI・双郭出土遺物	第Ⅲ～双郭出土遺物
第20図 第Ⅴ～双郭出土遺物	26	PL.20 第Ⅳ郭出土遺物	
第21図 斜面からの出土遺物	27	PL.21 第Ⅴ～VI・双郭出土遺物	
		PL.22 第Ⅴ～VI・双郭出土遺物	第Ⅴ～双郭斜面出土遺物

9. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

I. 前 言

1. 調査にいたる経過

県道豊里・久居線は、久居市内より津市半田から県庁西側を通り津市北部の豊里地区にいたる道路である。昭和53年度この路線の内JR・近鉄津駅付近以北の部分について改良事業が計画された。今回調査を行った峯治城は、「伊勢名勝志」などで古くからその存在が知られていたが、第一次調査（分布調査）の結果、約5,000m²が事業地内に含まれることが判明した。

その結果をもとに県土木部都市計画課および津土木事務所と協議を行い、その保存策などを検討した結果、路線変更も困難であるため、該当部分について第二次調査を行うこととなった。

発掘調査は2年度に分けて行なった。平成元年度は8月1日から2年2月10日まで、平成2年度は5月7日から7月21日までであった。最終調査面積は約4,800m²であった。

2. 調査の方法

調査区の総延長が約120mとなること、最高部

と最低部の比高差が約17mであることなどから、発掘区内の地区設定については、4×4mのグリッドを基本として、それぞれの郭で独立したものとした。

郭は最高部を第Ⅰ郭とし北側へ順に第Ⅱ郭、第Ⅲ郭というように設定した。第Ⅰ郭より東側の郭は第Ⅳ郭より開始し順に設定した。斜面については傾斜が急なものもあり、グリッド設定は特に行わず、斜面ごとに番号を付けることとした。

平成元年度は標高約24mの第Ⅰ郭より開始し、北側の郭へと進むこととした。そして平成二年度に東側の郭を発掘調査した。第Ⅰ郭と第Ⅱ郭は急斜面のため重機の導入が不可能であったため、人力により表土包含層を掘削したが、第Ⅲ郭以降は重機（バッカホウ）により抜根、表土除去を実施した。排土は、調査地の両側が民有地であり、かつ竹林であったため調査地の両側に排出することは不可能であった。そのため、掘削により生じた土砂は計画路線内に排出する必要があり、ベルトコンベアにより調査地外の北西と南東の計画路線内に排出した。



峯治城全景（北東上空から）

II. 位置と環境

1. 位置

峯治城は、津市一身田大字上津部田字ツノ坪に所在する。峯治城のある津市北部は、伊勢平野のほぼ中央部を、平野を横断して東流する志登茂川、安濃川の中下流域に位置する。志登茂川は、安芸郡芸濃町の丘陵にその源を発し、その下流域によく沖積された平野を、安濃川とともに形成する。志登茂川右岸には標高30m前後の丘陵が安芸郡芸濃町内より津市広明町（JR・近鉄津駅付近）まで延びている。地質学的には中生代第三期（鮮新世）層の奄芸層群からなる（註1）。

峯治城（1）はこの丘陵の北東端部に位置する。

ここは伊勢平野が最も狭くなっているところでもある。標高25～30m近くを測り、眼下に參宮街道、伊勢平野はもとより伊勢湾、知多半島を一望する眺望の利く好所に位置している。

2. 歴史的環境

志登茂川流域を中心に時代順に概観するのが本来であるが、ここでは中世城館の分布を中心に述べてみたい。

中世、この地域は長野氏が支配していた。長野氏の出自などは、工藤一族という以外あきらかではないが、鎌倉時代末期には居住していたようである。

その被官には雲林院家・家所家・草生家・細野家・



第1図 遺跡位置図 1:50,000 (国土地理院 1:25,000 棚本・白子・津西部・津東部)

分部家などがみられ、安濃郡と奄芸郡を支配している（註2）。奄芸郡に属する中世城館は川北城、高野尾城、栗真中山城、上津部田城などが知られる。川北城、上津部田城は近年発掘調査がなされ川北城は平安時代末から南北朝期にかけての大規模な城館

であることが判明した（註3）。安濃郡では安濃城、太田城、分部城、浄土寺城、渋見砦などが知られる。室町時代末期、織田信長の伊勢侵攻を境に工藤氏の支配は終わる。



第2図 略測図



第3図 遺跡周辺地形図 1:5,000 (津市都市計画図)

III. 遺構と遺物

1. 第I郭

遺構

(1) 土壘・堀

S A 1 東辺に築かれた南北方向の土壘である。南部は削平されているため、全長は不明であるが西辺の S A 2 と同様第 I 郭の東辺を囲っていたものと思われる。現存長（上面）3.6. 8m、上面幅1.1. 1m～2. 9m、高さ（第 I 郭より）1mを測る。北半部が内方に張り出しており、櫓等の存在が想定されたため精査したが確認できなかった。南端部は外側に張り出している。

中央部上面に古墳時代前期頃と考えられる土坑 S K が検出されたため、S A 1 は現存高までは地山削りだしによって形成されたものと考えられる。中央や北より後世の開墾による溝が切り込んでいる。

S A 2 西辺に築かれた南北方向の土壘である。ほとんどが調査区外であるが、調査区内に8m、全長6.7m、上面幅2m、高さ（第 I 郭より）1. 4mを測る。

S A 3 北辺に築かれた東西方向の土壘である。北辺の出入口 S X 6 より東側の部分を囲う。現存長6m、幅2m、高さ0. 5mを測る。上部大半が削平されており基底部が残るのみである。なお北辺西側はほぼ完全に削平されており確認できなかった。

S D 4・5 S D 4 は S A 3 の下に位置し、断面逆台形を呈する。全長2.4. 1m、幅（S A 1 北端より）8m、深さ（S A 1 北端より）5. 5mを測る。底は幅約0. 8mほどの平面となっている。S D 5 は土橋 S X 7 の西に位置し、本来であれば第 I 郭北辺西半の土壘に対応する壠であり、第 I 郭北端より深さ4. 2mのところに幅0. 2mほどの犬走りをL字状に巡らす。この犬走りよりも低い部分の断面形は長方形を呈する。S D 4・5ともに完全に埋没していた壠で、調査前にはその存在すら予想しえなかっただのである。埋土の堆積は非常に細かく整然としており、かなりの長年月をかけて埋まつた

ものと考えられる。S D 5 の底の部分は、大きな塊状の黄褐色粘質土で埋まっており、ある程度の人工的な埋め戻し作業が行われた可能性が考えられる。

(2) 出入口・土橋・門

S X 6 第 II 郭から第 I 郭への通路であり、S A 3 の西に位置し、ほぼ北に開口する出入口である。南は平坦であるが北半は緩やかな下りになっており S D 4・5 に架かる土橋 S X 7 にいたる。S X 6 と S X 7 の間は階段でつながっていたような様相を呈していたが確認できなかった。ただ階段以外の方法では距離、比高差からみて、つなげることは困難であろうと考えられる。

S X 7 第 II 郭から第 I 郭への通路であり、堀 S D 3・4 にかかる土橋である。長さ4m、上面幅3m、下面幅8. 8mを測る。地山を削って形成したものである。

S B 8 S X 6 から郭内に入る門跡である。1間×2間の礎石建物である。長径0. 5m前後の花崗岩を礎石として使用している。中柱の中央に径1.5cmほどの平らな石が埋め込まれており、戸当たりと考えられる。柱間は桁行きが2. 1m、梁間が棟通りより外に1. 2m、内に0. 9mを測る。

上部構造は2. 1m×2. 1mの四脚門と考えられる。なお S B 8 の北1mほどのところに、柱穴の痕跡と考えられるピット状の遺構が2個東西に並び、S B 8 に先行する建物と考え精査したが建物を確認できなかった。しかし、先行建物が存在したのではないかと考えられる。

(3) 溝

S D 9 S B 8 の東北端より北に延びる長さ4m、幅0. 3mの溝である。S B 8 の排水溝であろう。

S D 10 S B 8 の西北端より約1m北向し、その後東に斜行し S D 9 と合流する。長さ4. 6m、幅0. 2mを測る。斜行する部分は攪乱により乱されている。

S D 11 第 I 郭調査部分のはば中央に位置する



第4図 溝査前地形測量図 (1 : 1,000)



第5図 調査前郭配置図 (1:1,000)



第6図 遺構平面図 (1:200、方位は座標北)



第7図 遺構地形図 (1:200)

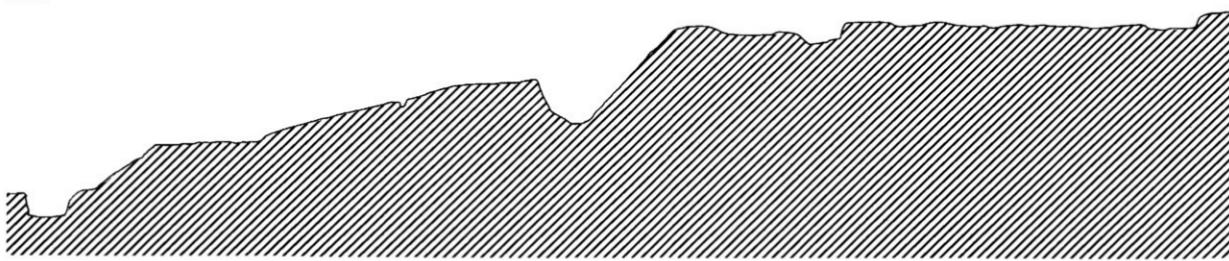
G
23.0 m

H



F
23.0 m

E



0 20 m

第8図 調査区断面図 (1 : 200)

L字状の溝である。北西端は開放し S B 8 に続くものと思われる。通路的な性格を持つものではないかと考えられる。

S D 1 2 S X 1 8 の南西端より西に延びる長さ 3 m、幅 0. 2 m ほどの溝である。

S D 1 3・1 4 第 I 郭の中央を東西に通る溝である。後世に掘られたものと考えられる。

(4) 井戸

S E 1 5 直径 2 m の素掘りの井戸である。深さ 4 m まで掘削したところ、プラスコ状に拡がっており、土砂が崩落する危険があったため掘削を中止せざるを得なかった。そのため深さは不明である。

(5) 土坑

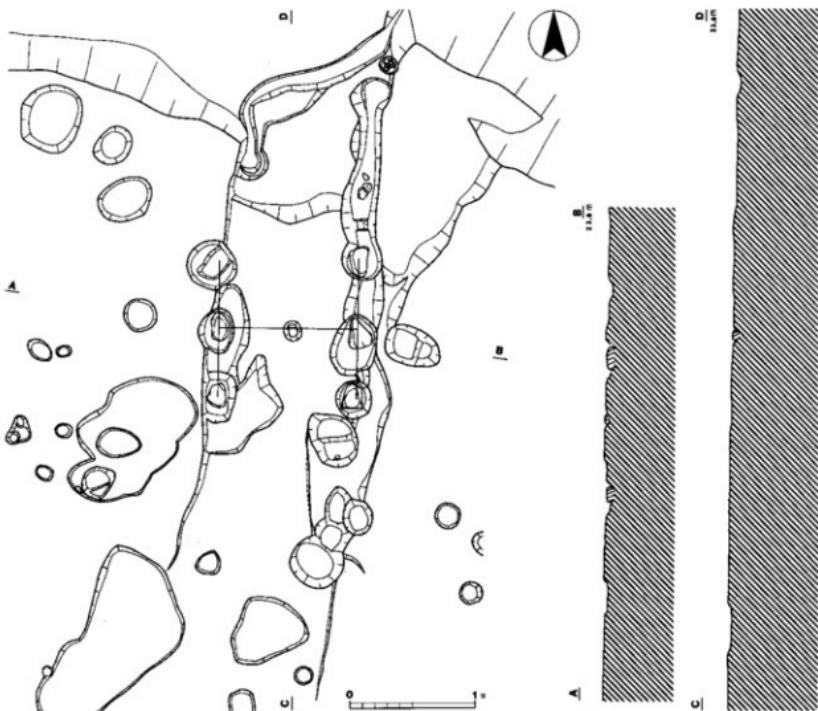
S K 1 6 第 I 郭の南西隅に位置する。調査区に

よって限られたため北東隅を検出したにとどまる。そのため全体の形状は不明である。北東隅はほぼ直角を呈する。

S K 1 7 S A 1 上面で検出した。2. 2 m × 2. 2 m のほぼ方形の土坑である。古墳時代前期の土師器が出土しており、城郭に先行する遺構である。

(6) 不明遺構

S X 1 8 S B 8 の南 3 m に位置する。2. 8 m × 1. 8 m を測る。幅 0. 3 m ほどの溝を長方形に巡らせた遺構である。性格は不明であるが、門の奥に位置することから板囲いの小屋状の建物であった可能性も考えられる。



第9図 S B 8 平面図・断面図 (1 : 40)

遺 物

土師器 盆 (1~16) 口縁部の形態、調整から2種類に分けられる。A類としたものは口縁部が底部から緩やかに内湾し、内面から口縁部外面までをナデ調整、底部外面を指オサエする。B類としたものは口縁部の内外面をヨコナデ調整することにより底部と明確に区別できるものである。

A類 (1~12)

- (1) は口径11.0cm、器高2.0cm、淡黄橙色。
- (2) は口径11.8cm、器高1.9cm、黄橙色。
- (3) は口径10.8cm、器高1.6cm、淡黄橙色。
- (4) は口径11.0cm、器高2.0cm、淡黄橙色。
- (5) は口径12.4cm、器高2.0cm、淡黄褐色。
- (6) は口径13.0cm、器高1.5cm、暗茶色。
- (7) は口径12.0cm、器高2.0cm、淡褐色。
- (8) は口径12.0cm、器高2.2cm、淡橙色。
- (9) は口径13.4cm、2.1cm、淡赤褐色。
- (10) は口径13.0cm、器高2.1cm、淡黄色。
- (11) は口径13.6cm、器高1.8cm、淡黄色。
- (12) は口径11.8cm、器高1.7cm、淡橙色。

B類 (13~16) (13) は口径12.0cm、

▲

器高1.7cm、淡黄褐色。(14) は口径11.8cm、器高1.8cm、明黄褐色。(15) は口径12.3cm、器高2.4cm、淡褐色。(16) は口径15.0cm、器高2.5cm、淡黄橙色。

土師器 羽釜 (17) 口径(復元)18.8cm、口縁部内面から外面鉢の下までをヨコナデ調整する。淡黄橙色。

山茶楕 (18) 口径14.6cm、器高4.6cm、淡灰色。体部は直線的である。高台にモミガラ痕を持つ。

青磁 盆 (19) 口径11.0cm、器高2.2cm、やや濃い青緑色の釉を施す。

捏鉢 (20) 口径(復元)33.8cm、淡橙色。軟質である。

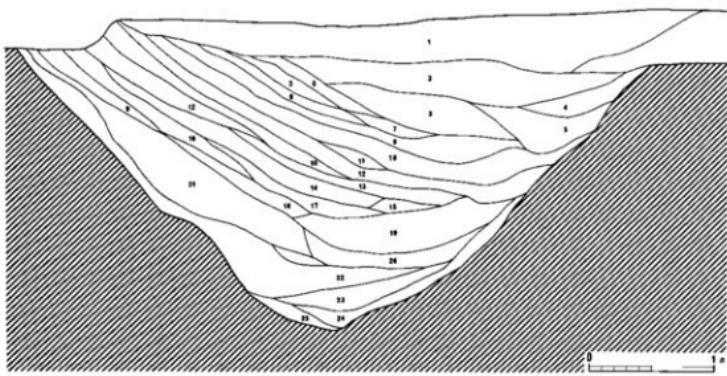
擂鉢 (21・22) 2点とも、口径、器高とも不明。(21) は暗茶色。筋目は7本単位で6箇所あり、底部近くから搔き上げる。底部近くは使用により摩滅している。

壺 (23・24) 常滑産大壺の口縁部のみの破片である。

砥石 (27) 粘板岩質。幅5.2cm。

古墳時代土師器 (26・26) (25) は鉢で

■
10.1m



- 1 因褐色土 2 暗因茶色土 3 暗因茶色小礫混土 4 茶褐色土 5 淡灰茶色 6 淡茶色土 7 高色小礫混土 8 高色漿混土(黒色土ブロック面)
- 9 高色漿混土 10 淡茶色土 11 淡茶色小礫混土 12 淡茶色漿混土 13 淡茶色灰土 14 淡茶色土 15 灰色土 16 淡茶色小礫混土
- 17 淡茶色漿混土 18 茶色土 19 暗因茶色漿土 20 底因茶色漿土(小礫及び灰色小礫土ブロック面) 21 茶色土(灰色小粘土ブロック面)
- 22 淡茶色粘土 23 淡茶色粘土黄色層 24 淡茶色粘土(砂礫層) 25 黄褐色砂質土

第10図 SD 4 埋土土層断面図 (1:40)

口径 1.5, 8 cm、器高 1.0, 3 cm、橙色。

1・2・4はSE 1.5付近のピットから、3・1
1はSD 1.1から、7・8・9・1.1・1.2・1.4・
1.5・1.7はSK 1.6から、1.6・2.2はSE 1.5
から、2.5・2.6はSK 6から、その他は包含層か
らの出土である。

S D 4 出土の遺物

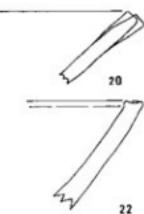
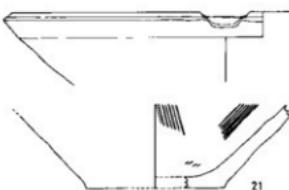
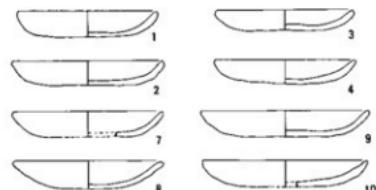
土師器 盆 (2.8) 全体をユビオサエで整形し
たのち口縁端部をヨコナデで整える。

土師器 鍋 (3.7) 口径 2.1, 0 cm、黄橙色。
口縁部及び体部外面上部をヨコナデ調整する。

土師器 羽釜 (3.8) 口径 2.2, 6 cm、黄橙色。
口縁部及び鶴の下までをヨコナデ調整する。体部外
面上部はハケ調整、下部は板ナデ調整を施す。

施釉陶器 盆 (2.9・3.0) (2.9) は口径 1
1, 6 cm、器高 3, 1 cm、(3.0) は口径 1.2, 0
cm、器高 3, 1 cm。いずれも淡緑色の灰釉を高台内
側以外の全面に施す。生地はロクロナデにより調整
され、淡灰白色を呈する。瀬戸産と考えられる。

天目茶碗 (3.1～3.4) (3.1) は口径 1.2,
0 cm。(3.2) は口径 1.1, 4 cm。(3.3) は口径
1.2, 0 cm。(3.4) は高台径 3, 8 cm。いずれも



黒褐色の鉄釉を施す。

施釉陶器 丸碗 (3.5・3.6) (3.5) は口径
1.0, 2 cm、淡緑色の灰釉を施す。(3.6) は口径
1.0, 2 cm、器高 6, 2 cm、体部内面及び外面上部
に淡緑色の灰釉、外面下部に暗茶色の鉄釉を施す。

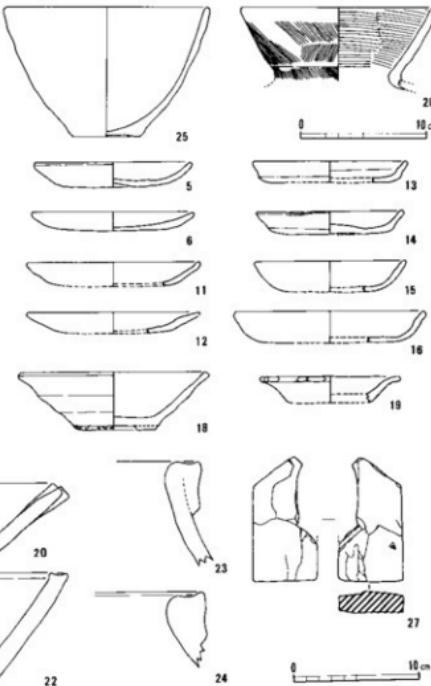
青磁 梵 (3.9) 底部径 5, 4 cm。見込みに陰
刻を施す。

擂鉢 (4.0・4.1) (4.1) は底部径 9, 6 cm、
暗赤灰色の鉄釉を施す。筋目は 8 本単位で 8 箇所、
底部付近から搔き上げる。底部内面にも十文字状に
施す。

甕 (4.2) 常滑産の大甕である。口径不明。

五輪塔 (4.5・4.6) 一石五輪塔の空風輪部
(4.5) と水輪地輪部 (4.6) である。砂岩質。

その他の遺物 (4.3) は火舍の破片と考えられ
る。暗灰色。(4.4) は粘土をやや扁平に丸め、焼
成している。片面にX字状のくぼみが施される。



第11図 第I郭出土遺物 (1:4)

S D 5 出土の遺物

土師器 四 (4 7 ~ 5 1)

(4 7) は口径 8.4 cm、器高 1.7 cm、乳褐色。
 (4 8) は口径 10.0 cm、器高 1.5 cm、灰白色。
 (4 9) は口径 12.0 cm、器高 2.1 cm、灰白色。
 (5 0) は口径 11.0 cm、器高 2.0 cm、淡黄橙色。外面にユビオサエ痕が残る。A類。
 (5 1) は口径 14.1 cm、器高 2.4 cm、淡褐色。B類。

土師器 羽釜 (5 2 ~ 5 4) (5 2) は口径 3.5 cm、橙色。口縁端部内面から外面の鋸の下までをヨコナデ調整する。外面をハケ調整するが煤が厚く付着しており不明瞭。
 (5 3) は口径 2.7 cm、黄褐色。外面に斜め方向のハケ調整を施す。

外面には煤が付着する。(5 4) は口径 2.8.4 cm、橙色。外面をハケ調整するが煤が厚く付着しており不明瞭。

白磁 三耳臺 (5 5) 脚部径 2.5.2 cm。片部三方に把手をつける。

捏鉢 (5 6 ~ 5 7) (5 6) 口径 30.0 cm、器高 12.0 cm、橙色。内面に縱方向の板ナデを施す。使用痕明瞭。外面に指圧痕残る。(5 7) 口径 31.4 cm、器高 10.7 cm、明赤褐色。内面に縱方向の板ナデを施す。使用痕明瞭。

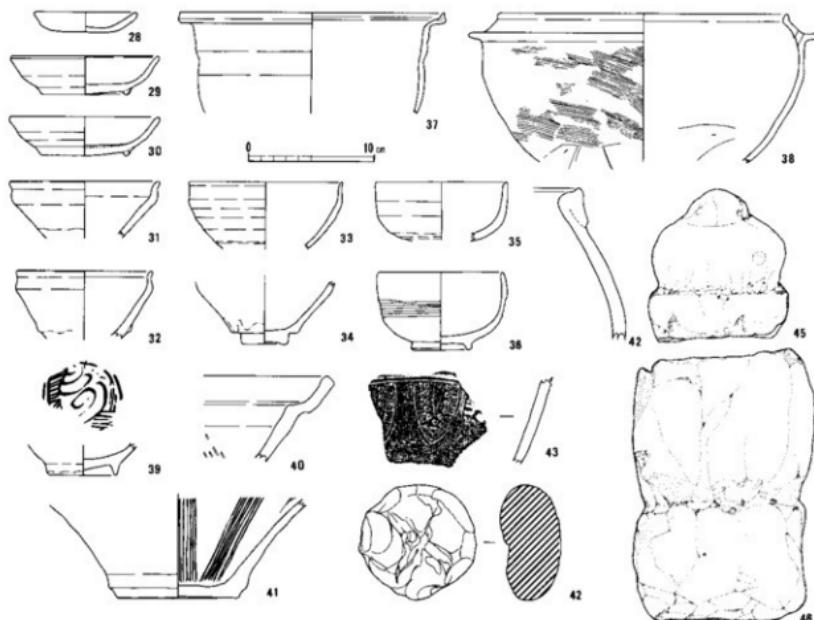
甕 (5 8) 口径 24.6 cm、暗赤色。常滑甕と考えられる。

2. 第 II 郭

遺 構

第 I 郭の北に位置する。標高は 1.8 m 前後、南北 1.3 m ~ 1.5 m、東西 4.0 m を測る。北東端部が調

査区外に延びる。西端から東へ 3.2 m ほどはなだらかな斜面となっておりこれは築城以前の旧地形と考えられる。整地土の面では特に遺構が検出されなかつたため、古墳時代前期の土師器片を包含していた黒



第12図 SD 4 出土遺物 (1:4)

色土層の下面まで掘削した。東部10mは、地山整形により平坦地となっている。このため建物等の存在を予想し、精査したが確認できなかった。径10cm前後的小ピットが数個検出されたが建物とするにはいたらなかった。

(1) 導入路

S X 1 9 第Ⅲ郭より第Ⅱ郭に至る導入路である。S D 5 の西端部と、第Ⅱ郭の北西端部をやや下ったところに踊り場を持つ。西側面には高さ0.8mほどの土壘状の高まりを持つ。

(2) 溝

S D 2 0 S X 1 9 の上位の踊り場にあり、長さ4.1m、幅0.4m、深さ数cmを測る。北からやや東よりに向きを変えて流れる溝である。

(3) 土坑

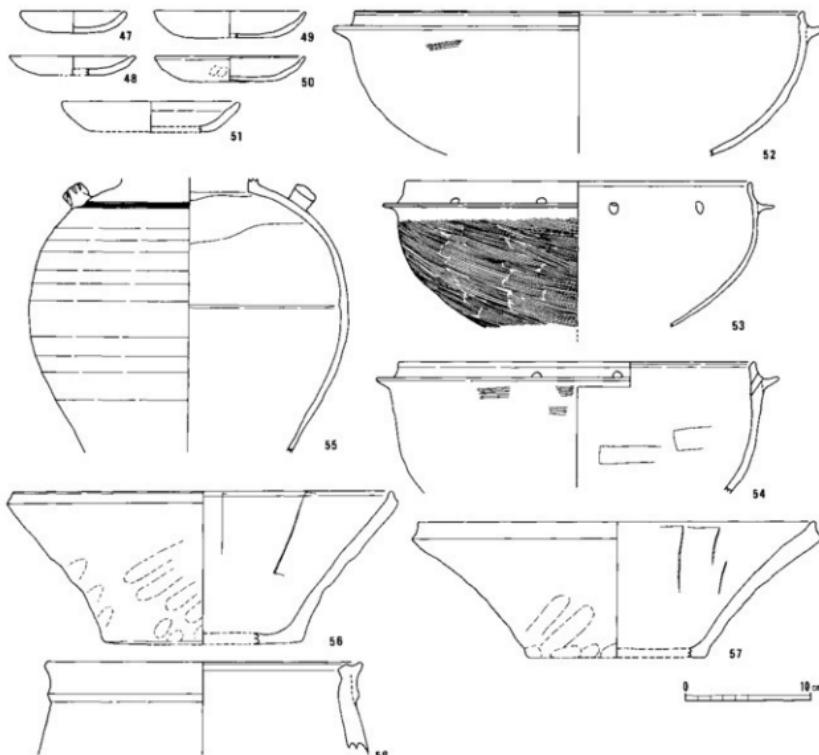
S K 2 1 1.6m×1.1m、深さ0.4mの方形土坑である。古墳時代前期の土師器片が出土した。

S K 2 2 1.8m×1.2m、深さ0.1mの長円形の土坑である。遺物も無く根などによる擾乱と考えられる。

S K 2 3 2.7m×0.7m、深さ0.1m前後の隅丸長方形の土坑である。中世期のものと考えられる土師器片が出土したが、細片のため造構の時期、性格を特定し得なかった。そのため城郭に伴うものか否かは不明である。

(4) 不明遺構

S X 2 4 S A 2 北斜面の下端に位置する。一部



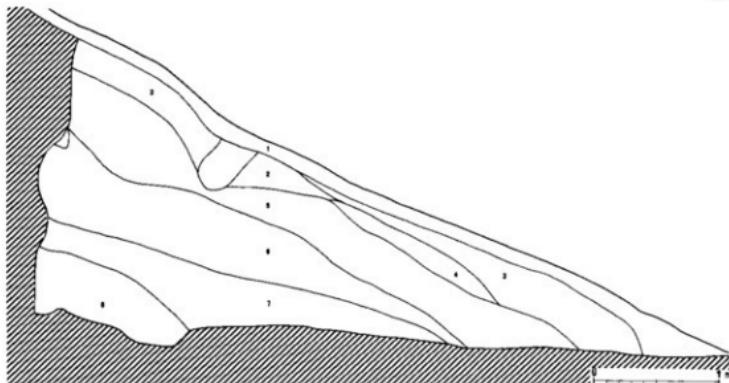
第13図 堀SD 5 出土遺物 (1:4)

が調査区外となっている。土壠斜面に対し抉るような加工を施している。

遺 物

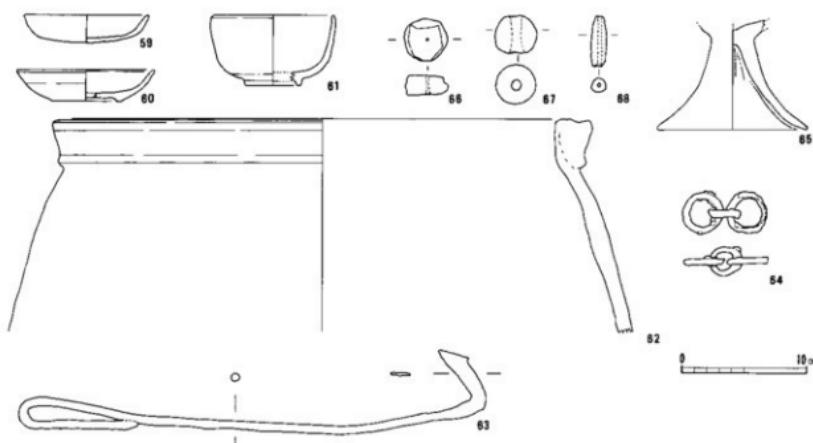
土師器 盆(59) 口径10.0cm、器高2.2cm、灰白色。体部の立ち上がりから口縁部まで、内外面ともヨコナデ調整する。B類。

59



1 フコ土 2 黄褐色土 3 暗灰色土 4 高褐色土 5 棕褐色土 6 棕褐色土やや砂質混じり土 7 暗褐色+棕褐色土(小石混じり土)
8 暗褐色砂質土

第14図 S X24土層断面図 (1:40)



第15図 第II郭出土遺物 (1:4)

である。高台は削りだしである。

甕 (62) 口径42.0cm、暗赤褐色。口縁部のみの破片である。常滑産と考えられる。

鉄製品 (63) 全長37.2cm。径0.7cmの鉄棒の片側を折曲げて取っ手とし、もう片側を鍔の手綱に曲げ、かつ偏平に加工している。(64) 3.2cmの輪2つを2.6cmの輪でつないでいる。

古墳時代前期 土師器 高杯 (65) 底径12.1cm、赤褐色。脚部のみである。損傷がひどく調整は不明である。

その他の遺物 (66~68)

(66) 径3.4cm、厚1.6cm、黒灰色。瓦質とも考えられる。土器の高台部分を再加工したものである。中央に径0.2cm程度の穴を穿ち、紡錘車として使用したものと考えられる。

(67) 径3.1cmのはば球状である。暗黄橙色。中心に径0.8cm程度の穴を穿つ。土錐か。

(68) 土錐。全長4.0cm、径0.8cm、橙色。すべて包含層出土である。

3. 第III~VI郭

遺構

調査面積、遺構数とともに少ないため、まとめて述べることとする。

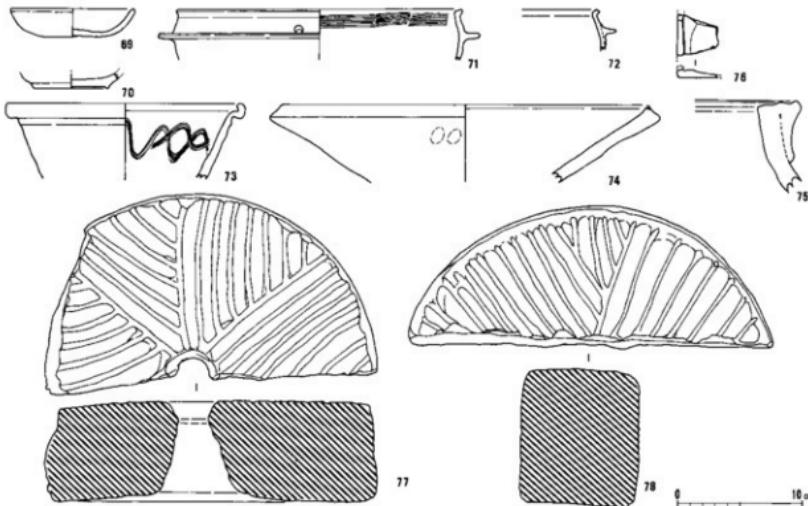
第III郭 東端部を調査したのみである。調査区外を含めると東西19m、南北55mを測る、峯治城で2番目の面積を持つ郭である。SX22の斜面裾に沿って幅1.2mほどの浅い溝があるが、調査前から溝状の落ち込みが認められ、後世の掘削によるものと考えられる。

第IV郭 西半部を調査した。調査区外を含めると東西37m、南北12m~5mを測る細長い郭である。西端部は、調査前にはこの部分を道としていたようであり、後世の擾乱によるものか、崩れていますがほぼなだらかな斜面であり、SD24の存在を考え合わせると第II郭への通路であるとも考えられる。

(1) 土坑

SK25 調査区東端で検出した。東西1.25m、深さ0.1mを測る。

(2) 据立柱建物



第16図 第III~VI郭出土遺物 (1:4)

S B 2 6 西端より 1 3 m のところで検出した、1間×1間の建物である。柱間は東西、南北ともに 1. 7 5 m、柱穴の深さは 0. 3 m ~ 0. 4 m である。西端部が通路であるならば、門であるとも考えられる。

第V郭 西端部を調査した。調査区外を含めると東西 2 5 m、南北 1 5 m ~ 6. 5 m を測る。

土坑

S K 2 7 径 4 m のやや角張った円形の土坑である。0. 1 5 m 余り掘りくぼめた中に 2. 1 5 m × 1. 2 m、深さ 0. 4 m の長方形の土坑を掘る。いわゆる二段掘りの土坑である。壁面はしっかりした粘土質である。水を溜めたものかと考えられる。

他に 2 つの土坑があるが、これらはいずれも根などによる擾乱であろう。

第VI郭 第V郭よりも 0. 7 m ほど上位に位置するが第VI郭とした。東西 7. 8 m、南北 5. 8 m を測るごく小さな平坦地である。東端を後世の道により擾乱されている。

遺 物

土師器 盆 (6 9) 口径 1 0. 0 cm、器高 2. 2 cm、灰褐色。内面に炭化物と思われるものが付着している。体部立ち上がりから口縁部までヨコ

ナデ調整する。B類。

土師器 羽釜 (7 1 ~ 7 2)

(7 1) 口径 2 2. 6 cm、暗橙色。口縁端部から鋤の下までヨコナデ調整する。内面は横方向のハケ調整である。(7 2) 口径不明、灰褐色。口縁端部を折り返し図示した部分全体をヨコナデ調整する。

施釉陶器 盆 (7 0) 高台径 6. 0 cm、縁灰色の灰釉。底部内面に陰刻を施す。瀬戸産。

施釉陶器 鉢 (7 3) 口径 1 9. 0 cm、縁灰色。灰釉。内面上部に、櫛状工具による幅 2 cm ほどの波状文を 2 条施す。

捏鉢 (7 4) 口径 (推) 2 9. 0 cm、橙色。口縁部をヨコナデ調整する。体部外面に指圧痕残る。

甕 (7 5) 口径不明、暗赤褐色。鉄釉。常滑産と考えられる。

石製品 (7 6 ~ 7 8)

硯 (7 6) 現存 3. 2 cm × 3. 2 cm、厚 0. 6 cm。小型の硯の破片である。材質は泥岩か。

石臼 (7 7 ~ 7 8) 径は (7 7) が (推) 3 3. 2 cm、厚は (7 7) が 8. 0 cm、(7 8) が 9. 5 cm である。2 点とも、下段の約 1/2 の破片である。材質は花崗岩と考えられる。

7 1 ~ 7 3 ~ 7 6 は第III郭包含層出土。7 0 は第IV郭包含層出土。他は第V郭 S K 2 7 出土である。

4. 第 VII 郭

遺 構

峯治城の北面の郭の内、最も低所に位置する郭である。東西 2 6 m、南北 1 0 m を測る。

(1) 掘立柱建物

S B 2 8 北西部に位置する。2間×4間の掘立柱建物である。棟方向は座標北に対し 3° 西偏する。東の柱通りの 2 個と北西隅の、併せて 3 個の柱穴を欠くが掘立柱建物と考えたい。柱間は桁行き、梁行きとともに 1. 4 m である。柱穴の直径は 0. 1 m ~ 0. 3 m と小さい。

(2) 土坑

S K 2 9 ~ S K 3 8 深さ 0. 1 m ~ 0. 3 5 m の偏平な、不定形土坑である。

(3) 井戸

S E 3 9 ~ 4 0 両者とも直径 1 m 余の素掘り井戸である。壁が砂質土であり、2. 6 m ほど掘り下げたところで崩落の危険が生じ、掘削を中止した。

S E 4 1 石組井戸である。掘形の直径は 2. 1 m、石組の直径は検出した上部で 0. 8 5 m、最下部で 0. 6 5 m を測る。石材は丸い河原石が大半であるが、五輪塔の部材も転用されている。遺構検出面より 3. 2 m 掘り下げたところで崩落の危険が生じたため掘削を中止した。

S E 4 2 立て板を丸く組んだ板組の井戸である。掘形の直径は 1. 8 m、板組の直径は 1. 2 m を測る。板組は幅 2 0 cm ほどの板を 1 0 枚使用している。後世の開墾時に造られたのものと考えられる。

(4) 溝

S D 4 3 ~ 4 7 中央部西寄りに位置し、東西方

向に延びるごく浅い溝である。後世の開墾時に掘られたのものと考えられる。

遺 物

土師器 梶 (7 9) 口径 12.4 cm、器高 3.8 cm、暗橙色。口縁部をヨコナデ調整する。体部内外面はナデ調整である。器形に歪みがあるため、器高は最大部分を計測した。口縁部に煤の付着があり、灯明皿として使用されたものと考えられる。内面に油脂類と思われるものが付着している。

土師器 内耳継 (8 4) 口径 39.4 cm、橙色。内面の口縁より約 1/3 以下をヘラケズリ調整する。他はヨコナデ調整する。内面にハクリ痕があり突起がつくものと考えられる。

土師器 羽釜 (8 5・8 6) 2 点とも口径 24.0 cm、淡橙色。口縁部内面から鈎の下までをヨコナデ調整する。他はユビオサエ調整とナデ調整を施す。口縁端部の形態が異なり、(8 5) がややシャープな印象を受ける。鈎部以下には、煤が付着している。

土師器 茶釜 (8 3) 口径 14.0 cm、淡橙色。全体にヨコナデ調整を施す。

施釉陶器 盆 (8 0・8 1)

(8 0) は口径 8.5 cm、(8 1) は口径 8.0 cm。2 点とも赤褐色の釉を内面から口縁部外面にかけて施す。一部は体部外面に垂れる。体部内面の中央付近から上方に、別の口縁が立ち上がる。この口縁を仮に第 2 口縁とする。焼成前に、第 2 口縁の一点所を、幅 2 cm ほどヘラで丁寧に切り欠く。内外面には煤、その他の付着物はみられない。用途は不明。

天目茶椀 (8 2) 口径 12.2 cm、黒褐色。鉄釉。釉の部分に艶がなく、若干泡立つようである。2 次的に火を受けているものと考えられる。生地の部分は灰色を呈する。

青磁 梶 (8 7) 緑青色。底部内面に陰刻花文を施す。体部内外面にも陰刻を施す。

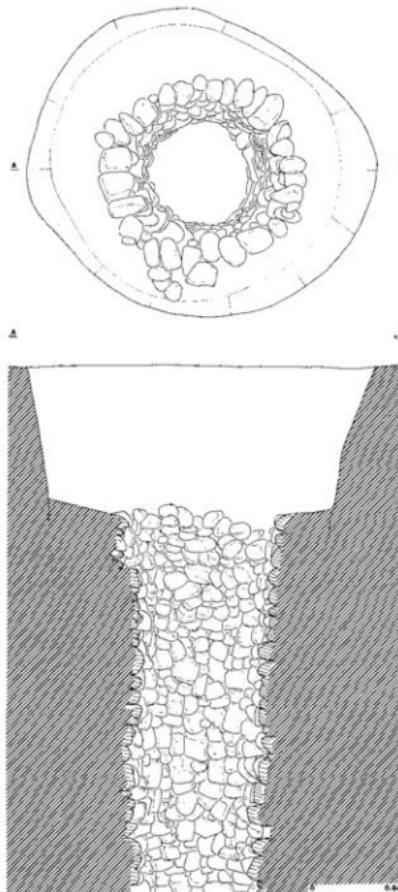
臺 (8 8) 口径 16.2 cm、暗赤褐色。陶器。

鉢 (8 9・9 0) (8 9) は口径 17.0 cm、暗赤褐色。(9 0) は口径 20.0 cm、赤褐色。2 点とも軟質の陶器のようである。(9 0) は 2 次的に火を受けたようである。火舎か。

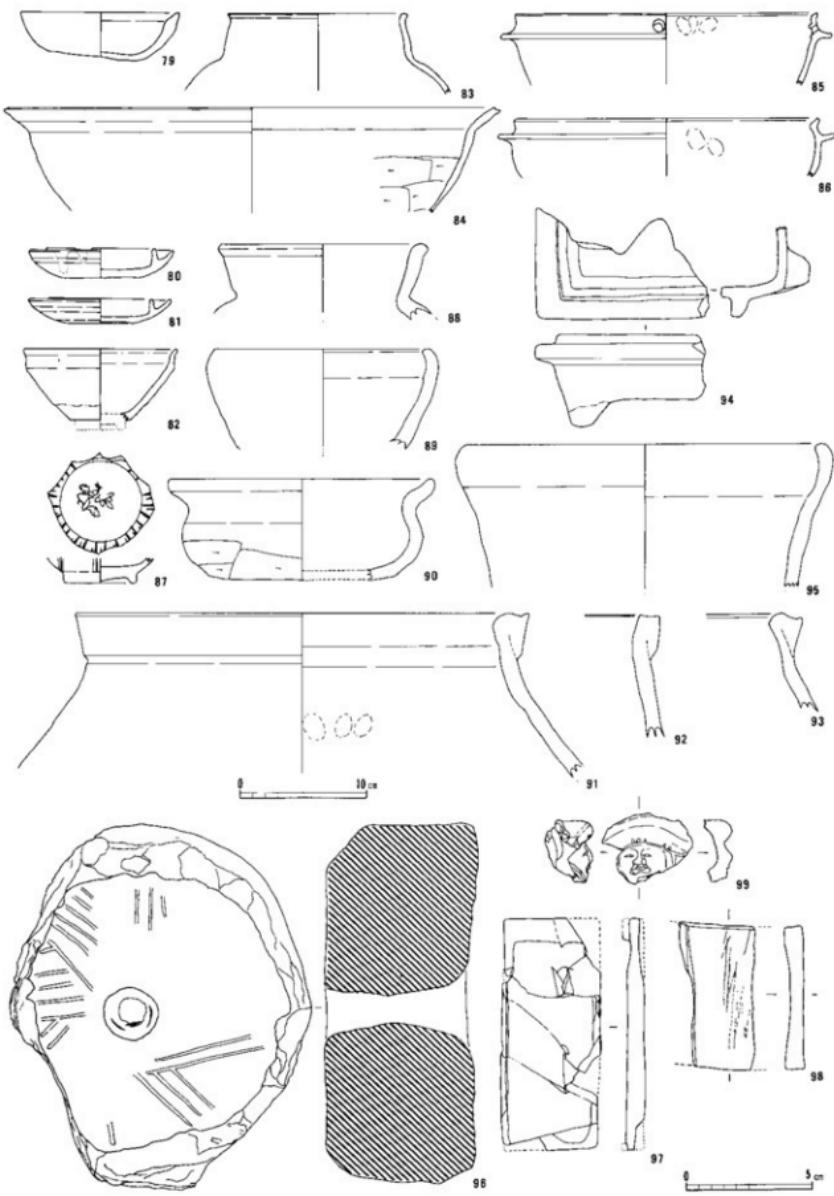
壺 (9 1～9 3) (9 1) は口径 36.0 cm、他は不明。

香炉 (9 4) 方形の香炉の一隅である。器高 8.2 cm、灰黄白色。高さ 2.1 cm の脚を、四隅に持つと考えられる。脚部および底部内面に煤の付着する部分がある。土師質に近い。

風炉 (9 5) 口径 29.8 cm、淡褐色。口縁部をヨコナデ調整する。内面に煤と思われるものが付着する。瓦質土器。



第17図 S E41実測図 (1:30)



第18図 第7郭出土遺物 (1 : 4、但し 97~99は1 : 2)

石製品（96～98）

石臼（96） 径（推）33.2cm、厚11.6cm。下段の一部である。材質は花崗岩と考えられる。

硯（97） 縦9.2cm×横3.8cm、高さは周縁で0.6cm。中央部で0.4cm材質は粘板岩と考えられる。

砥石（97） 長5.6cm、幅は不明。材質は

緑泥岩と考えられる。

その他の遺物

土人形（99） 七福神の一人、布袋の頭部と考えられる。

79・85はSK30、90はSK33、91はSK31、93はSK32、94・96はSE41、97はピット、その他は包含層からの出土である。

5. 第VII～XI郭

遺構

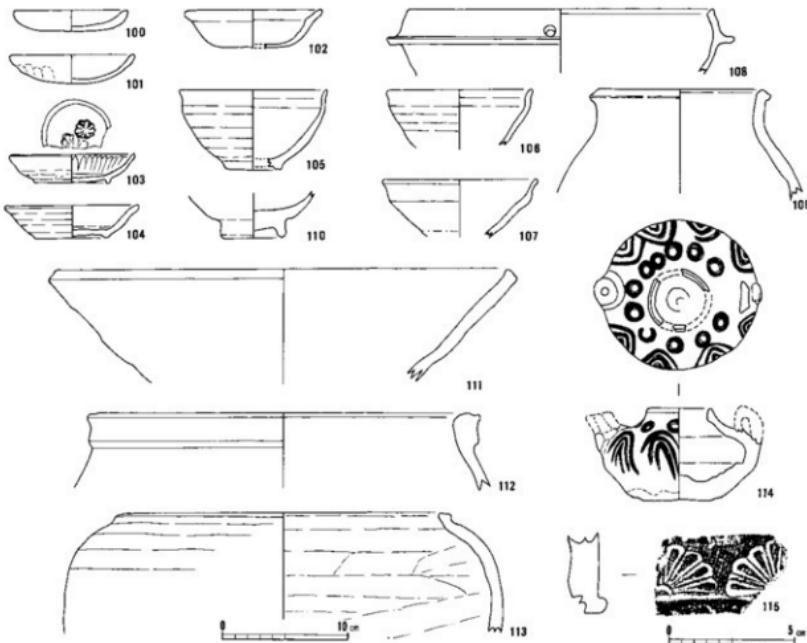
第VII郭 第I郭の東側に位置する。現存南北長50m、東西長10～12mを測る。南部を削平されているため南北長は不明である。いくつかのピットを検出したが、建物としてまとまるものは確認できなかった。

第IX郭～第XI郭 第VII郭の東に位置する。いずれ

も幅3m余を測る南北に細長い郭である。通路としての性格を持つものではないかと考えられる。

第IX郭 東側の最も低所に位置する。いくつかのピットと溝などを検出した。

なお、第IX郭の東側は調査前は水田となっており、重機により掘削を試みたところ、青灰色の砂質土が厚く堆積していることがわかった。堀の存在が予想されたが、湧水と崩落が激しく、掘削を中止せざる



第19図 第VII郭出土遺物（1：4、但し 114・115は1：2）

を得なかった。

遺 物

第Ⅸ郭出土の遺物

土師器 盆（100～102）（100）口径9.1cm、器高1.7cm、暗褐色。ハクリが激しく調整は不明である。（101）口径10.0cm、器高2.2cm、暗橙色。全体にハクリが進んでおり調整は不明瞭であるが、外面の口縁部以下はユビオサエ調整、内面はナデ調整する。口縁部は不明。また口縁部は歪がある。

土師器 梶（102）口径1.0cm、器高3.1cm、乳褐色。体部内面及び外面上半部をヨコナゲ調整する。

土師器 羽釜（108）口径24.4cm、暗褐色。ハクリが激しく調整は不明である。

施釉陶器 盆（103・104）（103）は口径10.0cm、器高2.3cm、淡緑色の灰釉。底部内面に花文を陰刻する。体部内面には蓮弁状に浅い陰刻を施す。（104）は口径10.4cm、器高2.6cm明赤褐色。鉄釉。

天目茶椀（105～107）（105）は口径11.8cm、器高6.4cm、黒褐色。鉄釉。（106）は11.4cm、黒褐色の鉄釉。（107）は口径12.3cm、黒褐色。鉄釉。

陶器 壺（109）口径13.0cm、明褐色、胴部内面に指圧痕が残る。

青磁 梶（110）高台径7.2cm、淡緑色。

捏鉢（111）口径36.2cm、口縁部及び外縁上部は暗褐色。鉄釉。他は淡橙色。外面下半部に指圧痕が残る。

壺（112）口径（推）31.2cm、外面は暗茶褐色、内面は明褐色。常滑産と考えられる。

陶器 壺（113）口径24.0cm、外面は淡橙色、内面は暗赤褐色。

施釉陶器 水滴（114）胴部径6.0cm、濃緑色の灰釉を施す。上部には筒状工具によるリング状の陰刻、胴部には蓮弁状の陰刻を施す。口先と取っ手を欠損する。

瀬戸産と考えられる。

火鉢（115）厚1.2cm、橙色。瓦質の外面に菊花文の上半部を連続的に施文する。

第Ⅹ郭～第Ⅺ郭出土の遺物

土師器 盆（116）口径12.8cm、器高1.9cm、橙色。体部中央に段を持つ。

土師器 梶（117）口径12.0cm、器高4.0cm、灰白色。口縁部及び外面のハクリが激しい。外面には指圧痕が残る。

施釉陶器 盆（118）口径8.8cm、器高2.4cm、淡緑色。灰釉。釉がガラス化し黄色になる部分もある。底部内面に陰刻花文を施す。

青磁 梶（119）高台径5.8cm、緑青色。生地は淡灰色。

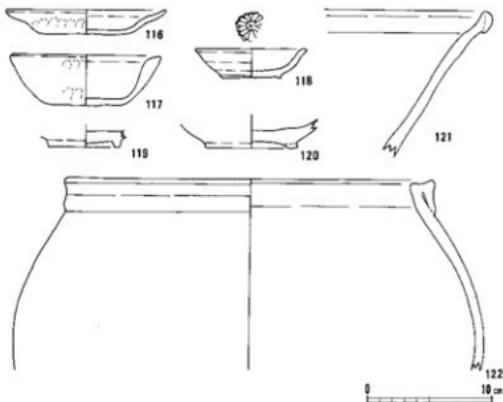
山茶碗（120）高台径7.4cm、灰白色。高台にモミガラ痕が残る。

捏鉢（121）口径不明、暗赤灰色。口縁部を折り返している。

壺（122）口径29.8cm、外面は灰白色、内面は赤灰色。常滑産と考えられる。

斜面などからの出土遺物

土師器 盆（124～126）（124）は口径8.5cm、器高1.9cm、淡黄色。口縁部全体に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと考えられる。（125）は口径9.8cm、器高1.9cm、淡褐色。（126）は口径12.0cm、器



第20図 第Ⅸ～Ⅺ郭出土遺物（1：4）

高2.0cm、淡黄橙色。

陶器皿(123) 口径7.6cm、器高1.6cm、黒灰色。俗に山皿と呼ばれているものである。

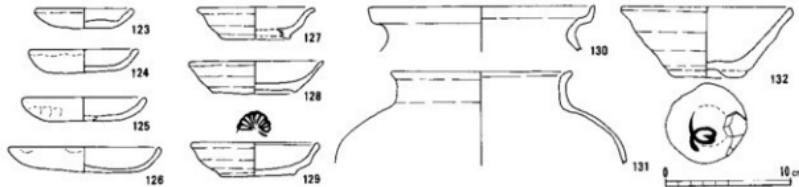
施釉陶器(127~129) (127)は口径9.4cm、器高2.5cm、黄緑色。(128)は口径10.7cm、器高2.5cm、黄緑色。底部内面に陰刻花文を施す。(129)は口径10.0cm、器高2.6cm、灰黄色。底部内面に陰刻花文

を施す。いずれも瀬戸産と考えられる。

茶釜(131) 口径14.4cm、橙色。全体に摩耗が激しく調整は不明瞭。

山茶碗(132) 口径13.6cm、器高5.8cm、灰白色。高台が一部を残してハクリしている。ハクリした後に墨書きされている。

土師器甕(130) 全体に摩耗が激しく調整は不明瞭。古墳時代のものと考えられる。



第21図 斜面からの出土遺物 (1:40)

V. まとめ

今回の調査は、道路改良事業にともなう調査であり、峯治城全体約20,000m²の内、1/4を調査したにとどまり、かつ、中心部からやや東にずれた部分であった。しかし、四脚門や堀をはじめ、城郭の構造に関するいくつかの成果を得た。また、遺物は整理箱で45箱出土したが、なかでも埋理土より出土した遺物は、中勢地区における当該時期の貴重な資料になろう。最後に今回の成果を記し、まとめとしたい。

1. 時期

城館成立以前では、古墳時代前期の土師器を伴う遺構が検出され、この時期に丘陵が何らかの形で利用されたことがわかる。

城館の成立時期については、出土遺物量が少なく、かつ包含層出土が大半であるため、現状では明瞭でない。包含層からは鎌倉時代後期頃に比定できる山茶碗が出土しているものの、城館に伴ったものかどうかは不明である。廃絶期は、堀から出土した遺物から室町時代末と考えられるが、埋土上層からは江戸時代初期頃の遺物も出土しており、堀が埋まりきるのはこの時期以降であろう。

2. 郭構造

峯治城は標高21.5mほどの第Ⅰ郭を主郭とし、その周りにいくつかの郭を配し、さらに、その周りに細長い平坦部を何段か設けるという郭配置がなされている。詳細は後述するが、北西方向からの導入路の防御的機能が高いことや、第Ⅰ郭の門が北に向いていることなどから、城館は北を強く意識して造られたと考えられる。またSA2の、第Ⅲ郭への斜面がかなり緩やかであるが、本来はより急傾斜であったものか、あるいは更なる防御施設として堀などが存在する可能性も考えられる。

南側については、大正末の工場用地造成にともなう土取りにより破壊されており、不明であるが、おそらく東側の第Ⅳ郭と同規模程度の郭が存在したであろうと考えられる。

3. 遺構

城館成立以前の遺構としては、SK7・21があ

る。いずれも、古墳時代前期のものであり、その性格は今一つ不明であるが、丘陵斜面に立地している遺構として注意される。

峯治城においては、第Ⅰ郭が、主郭となる中心の郭であることは、調査前より明瞭であった。今回の調査区の制約上、第Ⅰ郭以外の郭についてはその性格を明確にすることは出来なかった。今回はすべての平坦地を便宜上郭として扱ったが、本来的には、いわゆる「郭」と、「腰郭」、さらに段や後世の開墾による削平面である可能性も考えられる。

このなかで、縦張り的に注目できるところは、下位の郭より第Ⅰ郭にいたる際の、防御機能を強く意識した導入路であろう。まず、第Ⅲ郭から第Ⅱ郭に至るには、屈曲した通路であるSX19を通る。SX19の西側面には高さ0.8m程度の、武者隠的な小土塁があり、第Ⅲ郭への侵入者に対しての、いわゆる「横矢の構え」となっている。また、それとともに第Ⅲ郭からSX19への侵入者に対しては、主郭である第Ⅰ郭の土壘SA2からの防御行為が行われたであろう。

SX19から第Ⅱ郭へ入るにも屈曲があり、調査時には今一つ明瞭ではなかったが、第Ⅱ郭西縁には若干の柱穴があり、あるいはこれらが櫓としてまとまるものかもしれない。

第Ⅱ郭から第Ⅰ郭に至るには、大きな空堀SD4・5と、第Ⅰ郭にともなう土塁がある。この間にある土橋SX7を通り、門SB8を経て、第Ⅰ郭にはいる。現在、門SB8は若干第Ⅰ郭の内側に入ったところに位置するが、本来は門の前面にまで土塁があつたのであろう。そうした場合、第Ⅱ郭から第Ⅰ郭に至る導入路（土橋SX7から門SB8まで）は、1.0m以上にもおよぶ、堀と土塁に挟まれた細長いものとなっており、この点でも防御性を高める要素の1つとなっている。

このように第Ⅲ郭から第Ⅰ郭へ至る経路は、複雑な屈曲や堅固な土塁などで防御性が高められているが、この城の存続時期である室町時代末から江戸時代初期にかけて流行する手法である枠形は少なく

とも今回の調査範囲では認められなかった。

城館廃絶以後は、今回便宜上第Ⅲ郭とした平坦地が、その生活面である。遺構としては井戸などが認められた。

4. 遺物

出土遺物は、大きく分けると、城館成立以前の遺物（古墳時代前期）と城館に伴う遺物、それに城館廃絶後の遺物に分かれる。今回は城館に伴う遺物について若干の問題点を指摘したい。

堀SD4・5からは羽釜、鍋などが多く出土した。これらにはいずれも煤が付着しており、日常的に使

用されていたことがわかり、峯治城が居館として機能していたことが窺える。

堀埋土からは、一石五輪塔が出土している。あるいは城館存続期に、城内のいずれかに置かれていたことも考えられよう。

最後に、注目できる遺物としては、白磁三耳壺と、瀬戸産の水滴がある。また、茶釜や瓦質風炉などもある。こうした遺物は城館主層が使用した蓋然性が高いが、今後他の城館出土遺物との比較検討をより詳細に進めていきたい。

註

- (1) 碓部 克編著『三重県地質図集』三重県高等学校理科教育研究会地学部会 1987年
- (2) 横本紀昭『伊勢国國人長野氏関係史料〔上〕』『三重大学教育学部研究紀要』第35巻 1984年及び 小坂宜広氏、小林秀氏のご教示による。
- (3) 『上津部田城趾発掘調査報告』津市教育委員会 1989年
『三重県埋蔵文化財年報15』三重県教育委員会 1985年
- (4) 奈良女子大学教授 村田修三氏のご教示による。

参考文献

- 瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要 IV 1985年
瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要 V 1986年
伊藤裕作「中世南伊勢の土師器に関する一試論」『Mie history』
1990年

P L A T E



航空写真（北西から）



調査前全景（北西から）



第一郭調査前全景（南東から）



第二郭調査前全景（北から）



調査前航空写真（南東から）



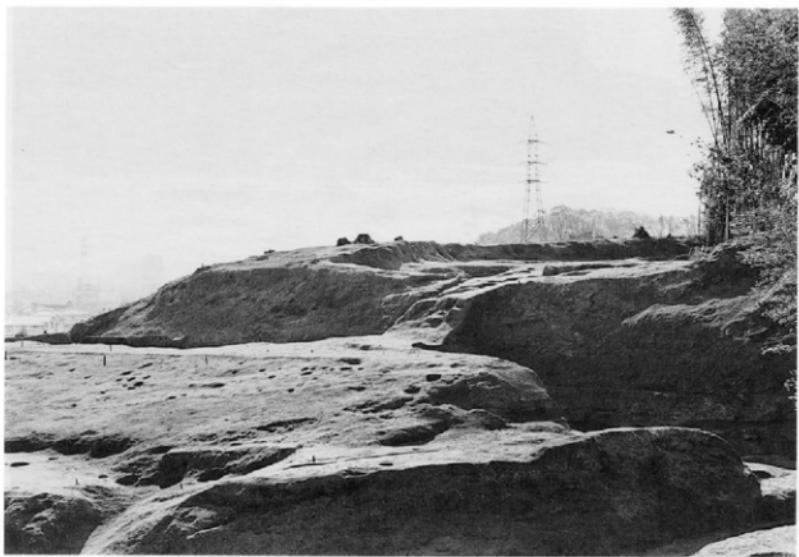
調査後航空写真（南東から）



調査後航空写真（北西から）



調査後全景（北西から）



第Ⅰ・Ⅱ郭（北西から）



第Ⅰ郭土塁 S A 1



第Ⅰ郭土橋 S X7・門 S B8



第Ⅰ郭門 S B8



第Ⅰ 郭不明遺構 S X18



第Ⅰ 郭堀 S D4・土橋 S X7・堀 S D5



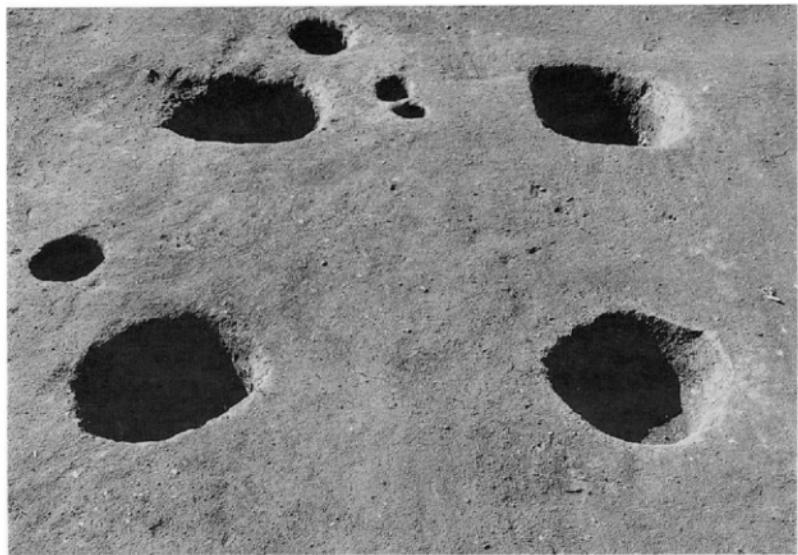
第Ⅰ郭堀 S D4



第Ⅰ郭堀 S D4土層断面



第II郭溝入路 S X19



第II郭S B26

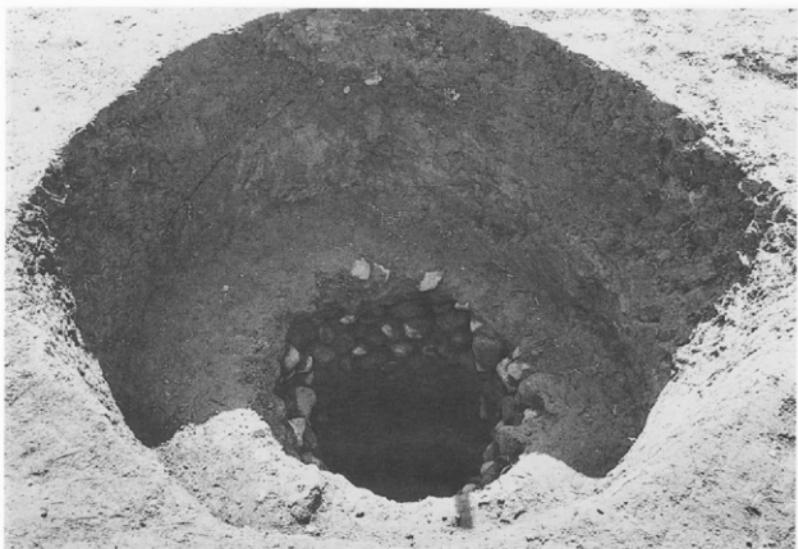
P L 10



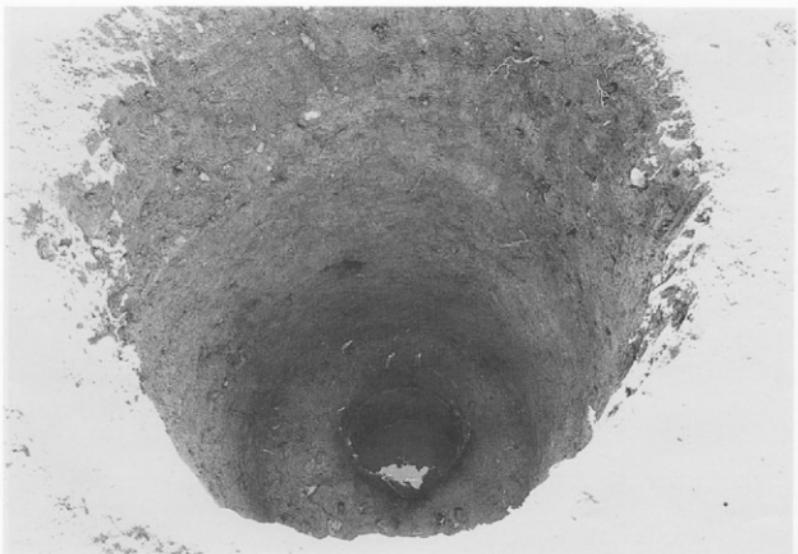
第Ⅶ郭全景（北から）



第Ⅶ郭S K31



第9郭井戸 S E 41



第9郭井戸 S E 42



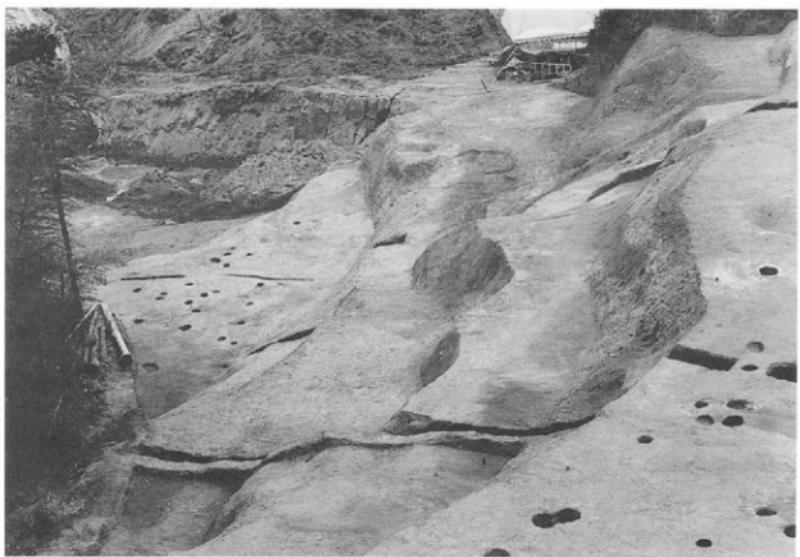
第Ⅱ・Ⅲ部（南から）



第Ⅱ・Ⅲ部（南西から）



第Ⅸ～Ⅹ郭全景（北から）



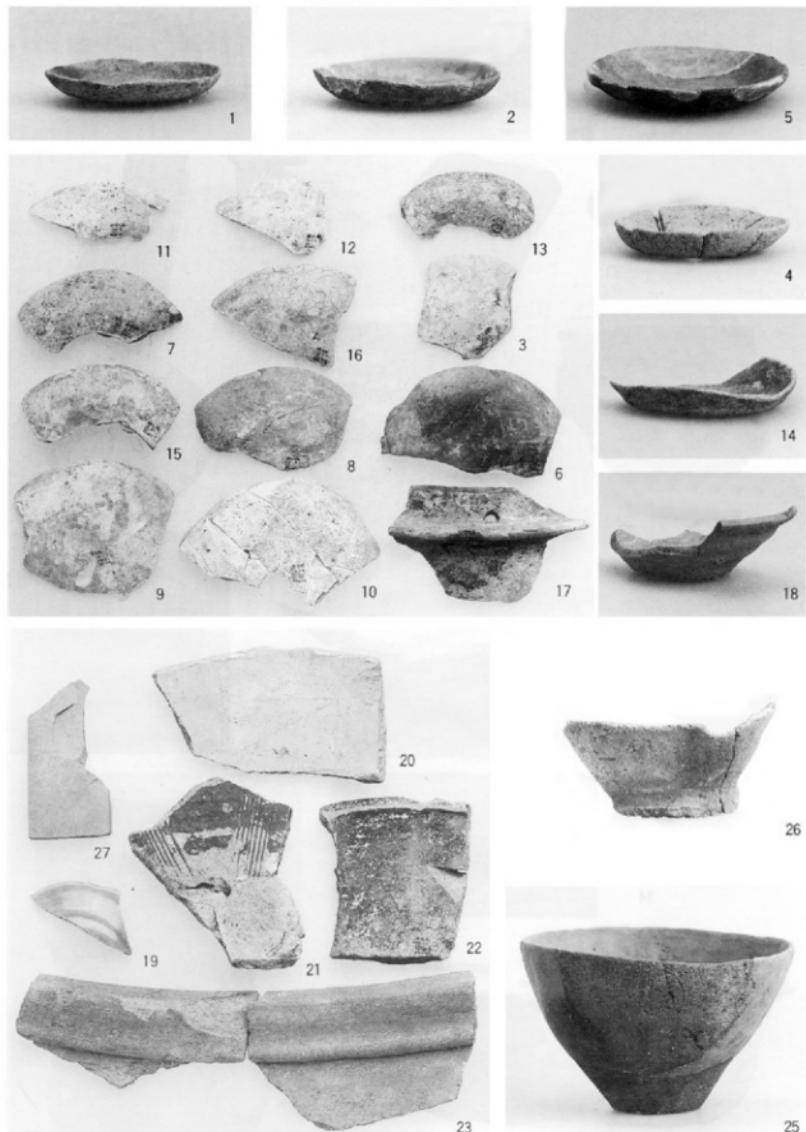
第Ⅸ～Ⅹ郭全景（北西から）



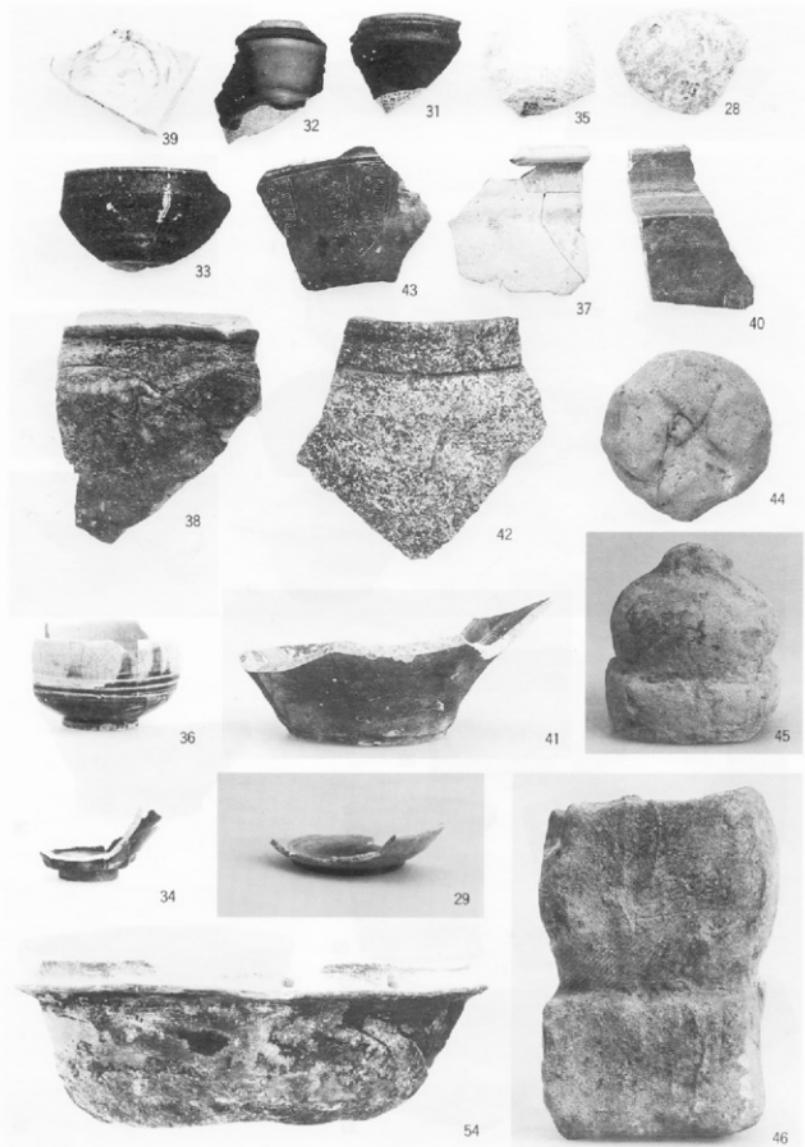
羽釜出土状况



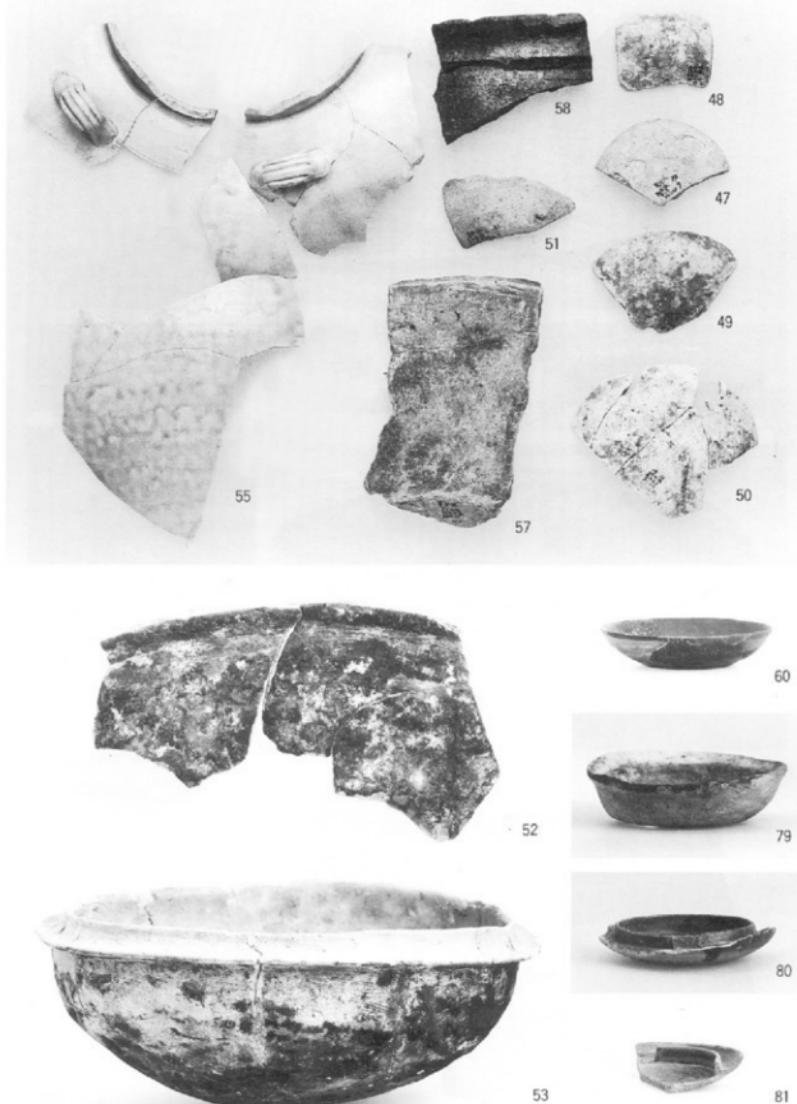
天目茶碗出土状况



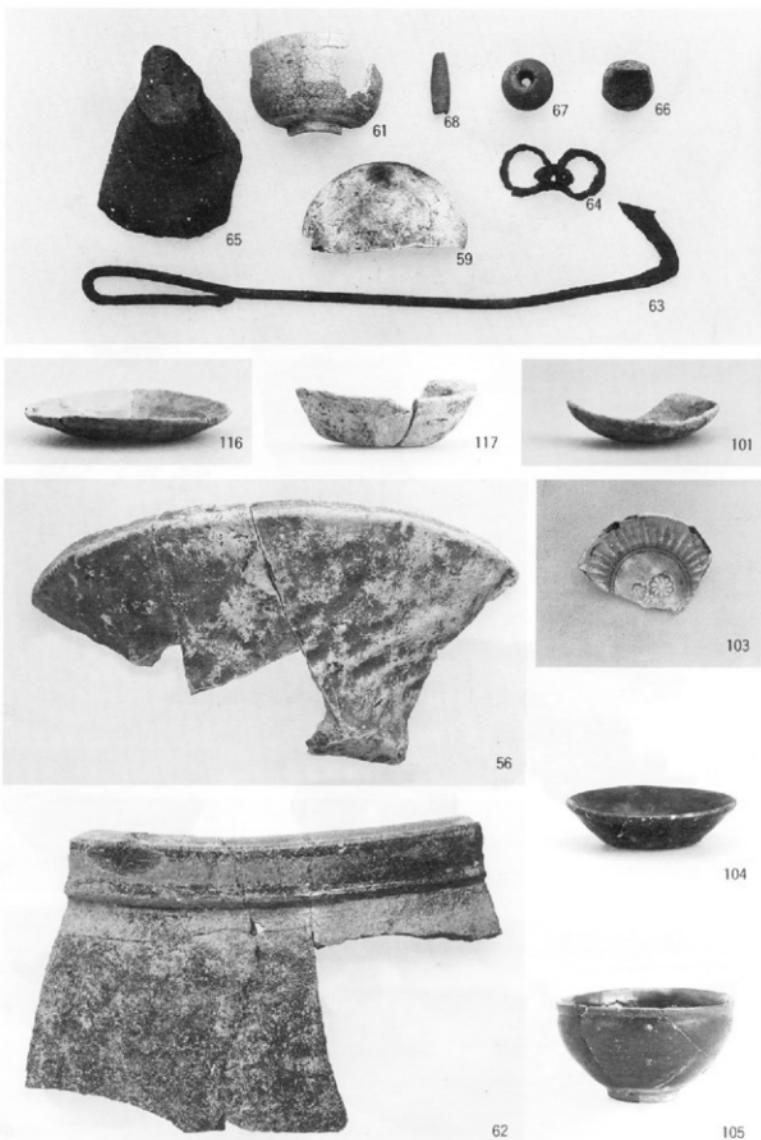
第Ⅰ 郭出土遺物 1~23・25・26 (1 : 3)



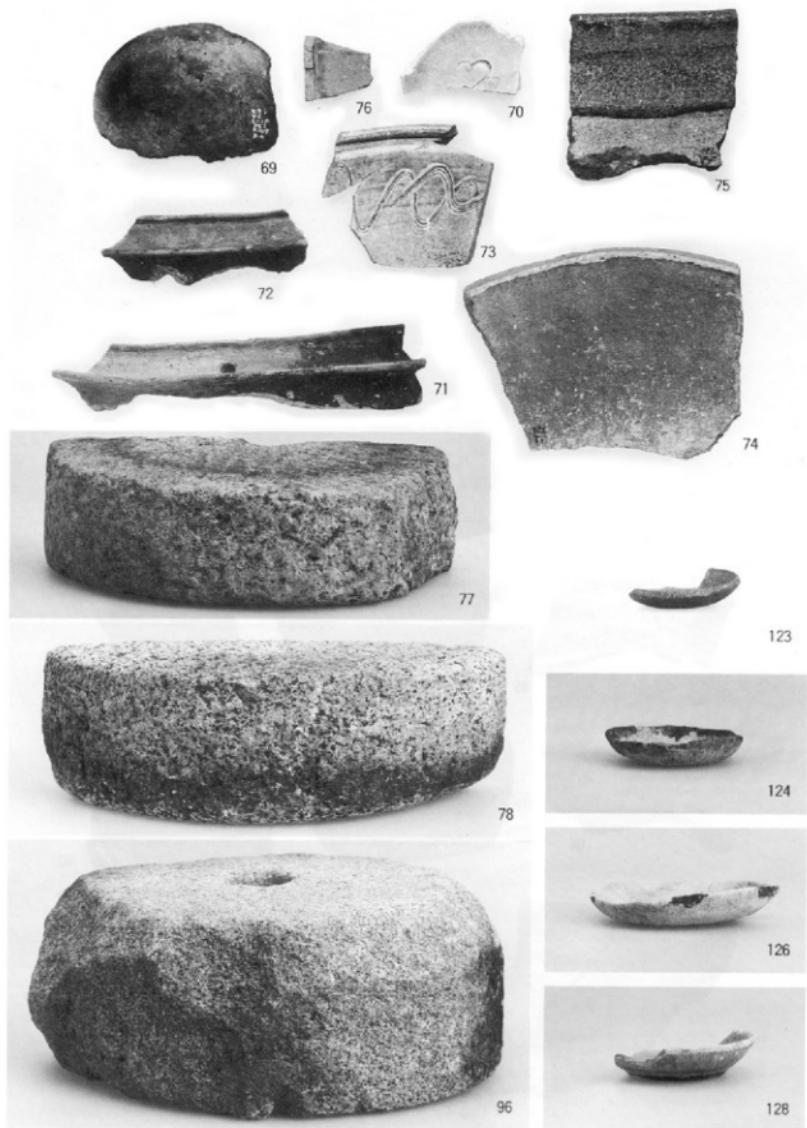
S D 4 出土遺物28・29、31～46、S D 5 出土遺物54（1：3）



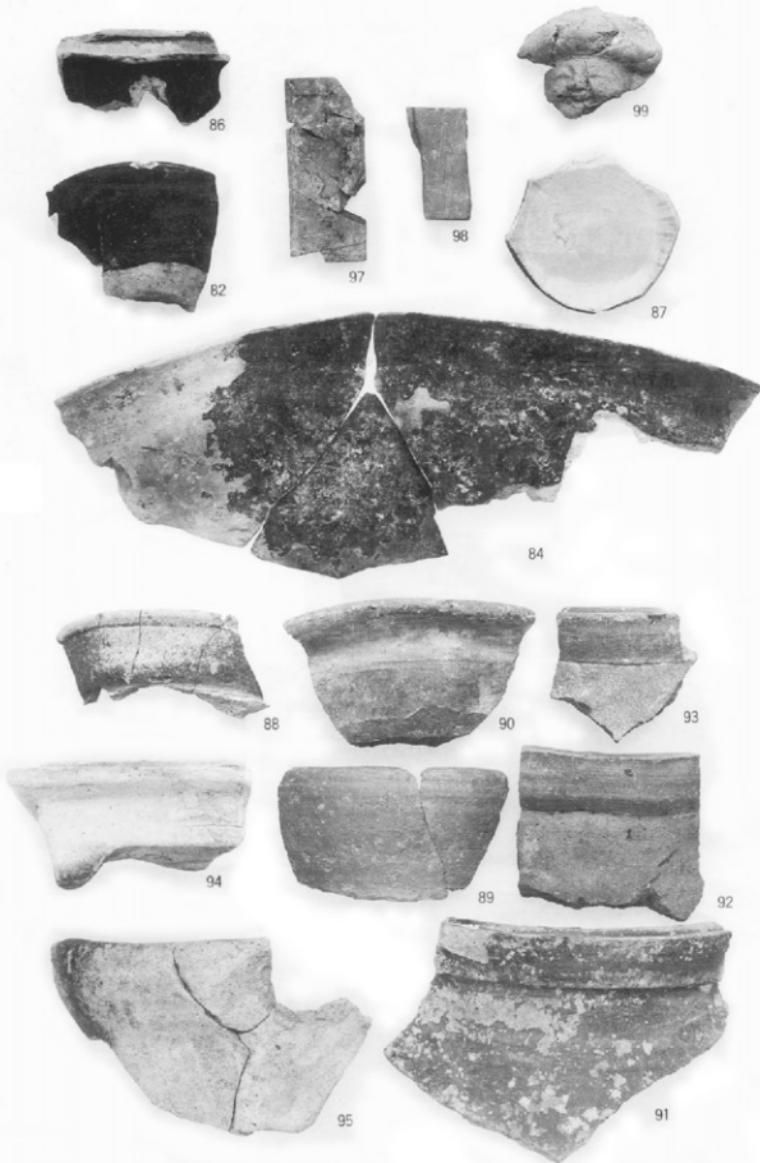
S D 5 出土遺物47~53・55・57・58、第II郭出土遺物60、第VII郭出土遺物79~81 (1 : 3)



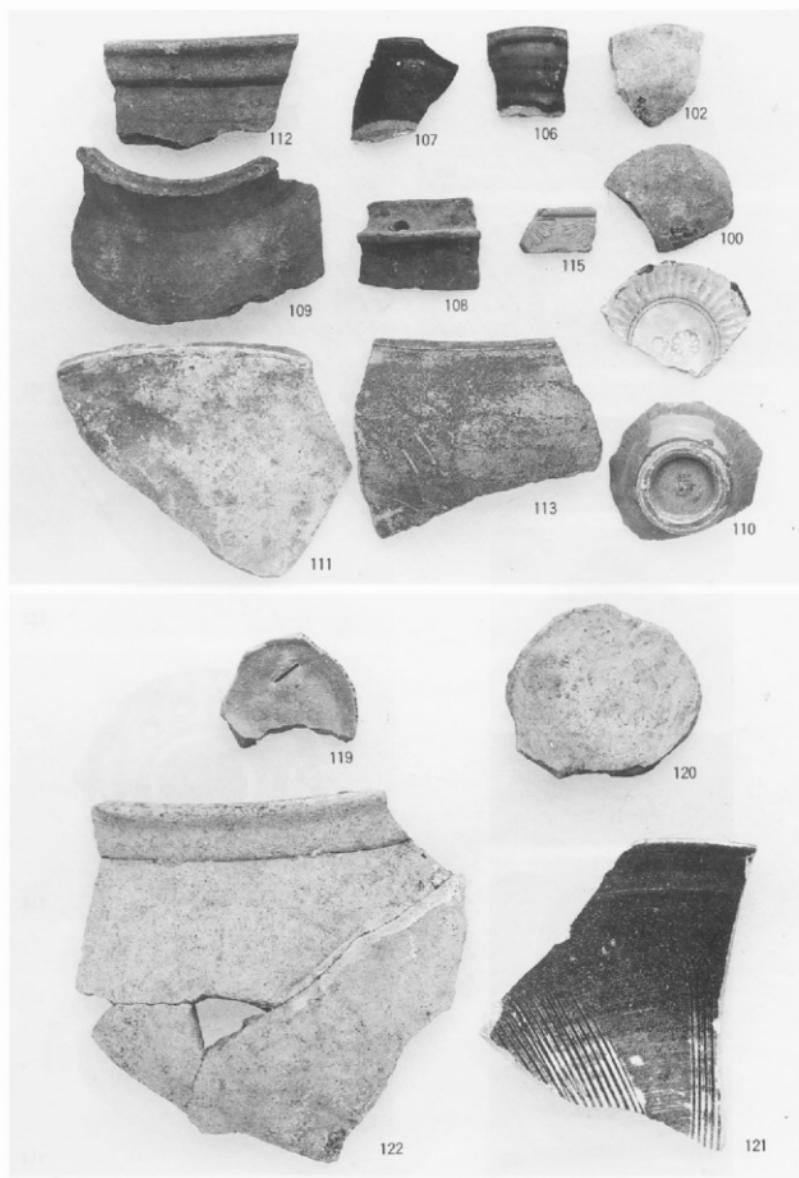
S D 5 出土遺物56、第Ⅱ郭出土遺物61~68、第Ⅲ郭出土遺物101·103~105、第Ⅸ~Ⅺ郭遺物116·117 (1 : 3)



第III～VI郭出土遺物69～78、第VII郭出土遺物96、第Ⅷ～Ⅸ斜面出土遺物123・124・126・128（1：3）



第Ⅶ郭出土遺物82·84·86·87~95·97~99 (1 : 3)



第Ⅷ郭出土遺物100・102・103・106～113・115、第Ⅸ～Ⅺ郭出土遺物119～122 (1 : 3)



125



127



131



130



132



118



114



118



129



129



114

第Ⅷ郭出土遺物114、第Ⅸ～Ⅺ郭出土遺物118、第Ⅹ～Ⅻ郭斜面出土遺物125・127・129～132（1：3、但し114は1：1）

平成3(1991)年3月に刊行されたものとともに
平成19(2007)年4月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告95

都市計画道豊里・久居線道路改良工事に伴う
峯治城跡発掘調査報告

1991年3月

編集発行 三重県埋蔵文化財センター
(三重県多気郡明和町竹川503番地)

印刷 光出版印刷株式会社
